

中山間地における地域社会と中学生との関わり

—長野県K中学校生と地域の大人との関係に焦点をあてて—

夏秋 英房 岡崎 友典

0. はじめに

本論考は、長野県K中学校2年生、3年生の全生徒(149人)およびその保護者(86人)への意識調査の第一次集計結果を元に報告するものである。まず、調査の概要と回答者の属性について述べ、そのうち、K中学校の生徒が地域の大人とどのように関わっているかについて分析する。とくに大人が誉めること叱ることと子どもの関わりについて基礎的な考察を行う。

1. 調査の概要

1-1 調査の方法と目的

本研究は、子どもの育つ環境としての家族、学校、地域社会の現状を、子どもそして保護者(親)がどのように受け止めているか、そしてそこにどのような教育上の課題が見られるかについて、中学生と保護者への調査票調査(アンケート)をもとに考察するものである。中山間地を対象としたのは、いわゆる子どもをめぐる問題・病理がこれまで大都市地域(中央)で多く生じてきたのだが、近年はこれが地方・農山村部まで拡散してきているからである。都市と農山村との境界としての中山間地といった地域類型が成り立つかどうか。急激に変動する現代日本の地域社会の教育環境の整備・改善について、実践上の課題を提起することを目指している。

調査地は長野県の東部・千曲川中上流域の「日常生活圏」の周辺に位置するK町、N村、M村で(以下代表してK町と表記する)、この1町2村で設置する組合立K中学校の2、3年生全員とその保護者を対象とする。K町の人口は約6,000人、産業別就業人口(2000年国調)は、第一次23.0%、第二次29.4%、第三次47.6%であり、商業・サービス業の多さに示されるように、圏域周辺地の中心都市の役割を果たしている。

1-2 調査の方法と調査項目

調査は学校経由で2006年6月～7月に実施した。生徒(2年生5クラス、3年生3クラス、計149名)は学級活動の時間に、校内放送で全体の説明(調査のお願い)を行った後、調査マニュアルに沿って学級担任と調査者が同席する形で実施した。保護者は生徒に調査票を自宅に持ち帰ってもらい、記入後の調査票を郵便で直接大学宛に送付してもらった。回収数は86(男13人、女73人 回収率57.7%)である。回答者の年齢構成は、30歳代14名、40～44歳36名、45～49歳21名、50歳以上11名である。調査項目は、家族の構造と意識、地域の社会関係と地域イメージ、子どもの進路と職業観、規範意識などで、これを日常生活場面での人間関係・コミュニケーションの実態、また地域活動への参加状況に即して分析した。また、調査票は親子を組み合わせ1つのデータとして分析ができるようにした。

なお、調査票の作成にあたっては、個人のプライバシーに立ち入る項目が多いこともあり、学校、教育行政担当者と綿密な打ち合わせを行い、また教職員、保護者の意見を聴取しこれを反映させた。

地域社会の「教育力」が問われるなかで、この調査は、家族の子育てや地域の育成活動のありかたと子どもの地域体験・地域意識との関係に焦点を合わせ、家族意識・地域意識・職業意識・将来への意識・規範意識、近隣との付き合い関係等の調査項目をとおして、親と子の間の意識と行動を捉えようとするものである。中山間地における子どもの教育環境の分析により地域社会の教育課題を探る手がかりを得るものである。

1-3 生徒と保護者の属性

生徒の男女比はほぼ同じで、部活動への加入は男子9割、女子8割で男子がやや高くなっている。学年による差は少ない。

生徒の家庭の世帯主の職業は公務員・団体職員が3割、

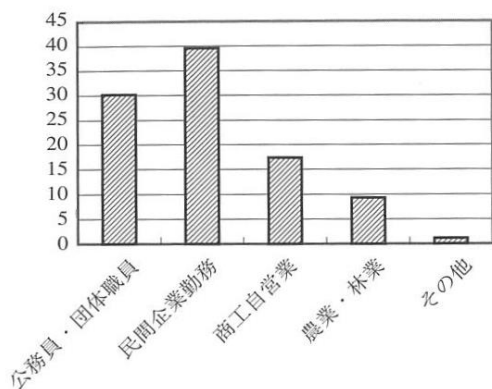


図1-1 世帯主の職業(%)

民間企業勤務が4割、自営業が3割である(図1-1)。

保護者のうち地元市町村出身は約6割で、居住年数20年未満が半数近くを占める。地元町村出身は男性9割、女性5割で、女性の出身地は多様である。結婚などによりK町近隣に住んだ女性が多いためである。これを反映して居住年数にも差が認められる。

2. 中学生と地域の大人との関係

2-1 中学生の地域活動への参加

図2-1はK中学校の生徒がどのような地域活動に参加しているかを示している。従来、地域活動は小学生を対象としたもので、中学生は部活に忙しく参加できないもの、という観念がある。K町においても大人からはそのような言葉が聞かれたが、伝統行事や夏祭り、文化的行事については生徒の参加率は比較的高いと言える。中学生の生活圏に地域との関わりが生きることがうかがえる。それでは、K町の中学生は地域の大人とどのように関わっているのだろうか。

2-2 地域の大人との関わり

地域の大人との関わりについて、2つの質問項目で尋ねた。1つは子どもがどのような関わりや視点を大人に対して抱いているか。もう1つは、大人から賞賛や叱正を受けることがあるか、についてである。

まず、子どもにとって「相談できる人がある」「尊敬できる人がある」「声をかけてくれる人がある」の3つの項目を尋ねた(図2-2)。声をかけてくれる人が「たくさんいる」と答えたのは約6割、尊敬できる人が「たくさんいる」と答えたのは約4割、相談できる人については3割が「たくさんいる」と答えている。

K町では多くの中学生が大人から声をかけられ、大人に

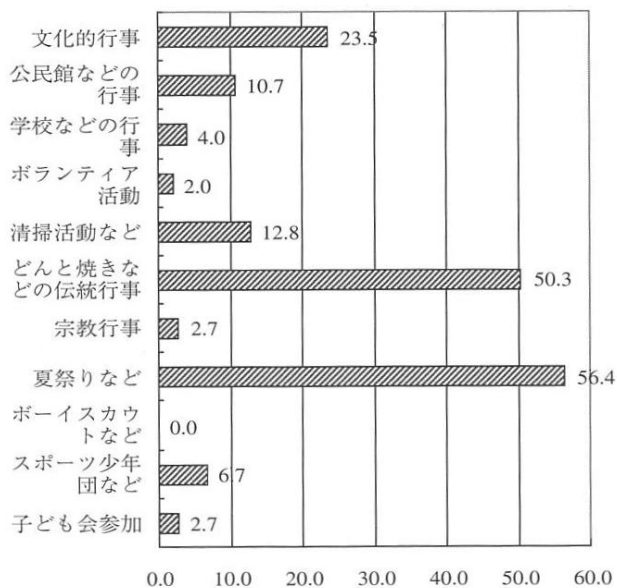


図2-1 K中学校の生徒の地域参加(%)

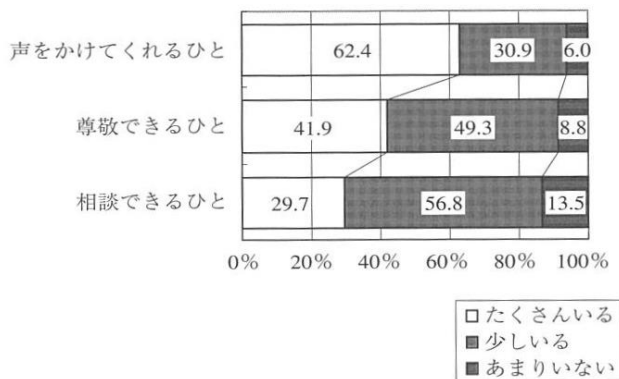


図2-2 地域の人との子どもの関わり

表2-1 地域の大人との関係と、相関係数(Pearson)

	相談できるひと	尊敬できるひと	声をかけてくれるひと
相談できるひと	1	.489(**)	.549(**)
尊敬できるひと	.489(**)	1	.428(**)
声をかけてくれるひと	.549(**)	.428(**)	1

** 相関係数は1%水準で有意(両側)。

対して尊敬のまなざしを向け、さらにいろいろと相談できる対象としておとなを見ている。相当濃い関わりを生徒が大人に対して結んでいるといえよう。

これら3つの項目は相互に有意な相関がある(表2-1)。声をかけられることが基礎となって、尊敬をし、さらには相談する、という形で関わりが深まり、子どもの行動の準拠に大人になってゆくのであろう。しかし、これらの正の相関があることを裏返せば、地域の大人と肯定的な関わり

りを持つ生徒と持たない生徒の違いが大きいことを示している。

(1) 地域の大人から誉められること、叱られることが多い
K中学生

それでは、単に声をかけるだけではなく、規範的な関わり方を地域の大人はしているのだろうか。大人から子どもが誉められることや叱られることの頻度を、親、教師、近所の人、知らない人の4つの立場の大人についてたずねた(表2-2)。親や教師から誉められることは5~6割の生徒があるようだが、いずれも叱られることのほうが多い。親はとにかく口やかましく注意をするようになってしまうのだろうか。

それに対して、近所の人から誉められることと叱られる頻度はほぼ拮抗しており、37%前後である。地域の大人との関わりの濃いK町のならではの数値の高さである。

表2-2 ほめられること、叱られること

(よくある+ときどきある)(%)

	ほめられる	叱られる
親から	61.8	83.9
先生から	53.0	61.7
近所の人から	37.6	36.9
知らない人から	18.8	1.3

さらに、知らない人から誉められることが2割近くの生徒にある。

このような賞賛はいったいどのような機会に経験されるのだろうか。また、どのような影響を子どもに及ぼすのだろうか。

ところで、大人から誉められることに関わる4つの項目は、相互に相関があり(表2-3)、とくに「親からほめられること」と「先生からほめられること」の相関(.470)と、「近所の人からほめられること」と「知らない人からほめられること」の相関(.532)が強い。それに対して、大人から叱られることについては、「近所の人からしかられる」と「知らない人からしかられる」だけに有意な強い相関(.625)が認められた。

そこで、「近所の人からほめられること」と「知らない人からほめられること」との関連に注目すると(表2-4)、近所の人から誉められる子どもは知らない人からも誉められることが多いことがわかる。逆に、近所の人から誉められない子どものほとんどは知らない人からも誉められないことがない。

さらに、この関係を総和に対する比率でみると(表2-5)、近所の人からも知らない人からもほめられることがない(あまりない+ぜんぜんない、表中網掛け)子どもが57%も

表2-3 大人からほめられることの相関係数(Pearson)

	親からほめられる	先生からほめられる	近所の人からほめられる	知らない人からほめられる
親からほめられる	1	.470(**)	.282(**)	.147
先生からほめられる	.470(**)	1	.285(**)	.209(*)
近所の人からほめられる	.282(**)	.285(**)	1	.532(**)
知らない人からほめられる	.147	.209(*)	.532(**)	1

** 相関係数は1%水準で有意(両側)。* 相関係数は5%水準で有意(両側)。

表2-4 「知らない人からほめられる」と「近所の人からほめられる」

(表頭項目の%)

		近所の人からほめられる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
知らない人から ほめられる	よくある	42.9	> 0.0	0.0	0.0	4.0
	ときどきある	7.1	< 31.0	> 10.9	3.4	14.8
	あまりない	35.7	< 50.0	> 40.6	> 13.8	37.6
	ぜんぜんない	14.3	19.0	< 48.4	< 82.8	43.6

表2-5 「知らない人からほめられる」と「近所の人からほめられる」

(総和の%)

		近所の人からほめられる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
知らない人から ほめられる	よくある	4.0	0.0	0.0	0.0	4.0
	ときどきある	0.7	8.7	4.7	0.7	14.8
	あまりない	3.4	14.1	17.4	2.7	37.6
	ぜんぜんない	1.3	5.4	20.8	16.1	43.6
合計		9.4	28.2	43.0	19.5	100.0

いる。近隣の大人との関わりの濃いK町においても、過半数の子どもは近隣の大人からほめられる経験が少ないことがわかる。

それでは、子どもが大人から誉められたり叱られたりする経験が、大人へのまなざしをどのように左右しているのだろうか。

「声をかけてくれる人がいること」は、近所の人からほめられること(.243)、知らない人からほめられること(.200)と有意な相関を持つ。また、「尊敬できるひとがいること」も、近所の人からほめられること(.197)、知らない人からほめられること(.191)と有意な相関を持つ。さらに、「親からしかられること」は、相談できるひとがいること(.181)、尊敬できる人がいること(.163)と有意な弱い相関を持つ。

つまり、声をかけてくれる人が地域にいる生徒は、近所の人から誉められることが多く(表2-6)、知らない人から誉められる(表2-7)体験にも結びついている。そしてそのような体験が、地域の大人に対する尊敬といった、大人を準拠とする社会化を促進している可能性を指摘でき

よう(表2-8, 表2-9)。

(2)親が自分の子どもを誉めると、子どもの地域の大人との関わりが深くなる

それでは実際に、親が自分の子どもを誉めたり叱ったりすることと、その子どもが地域の大人とむすぶ関係との間には、どのような関わりがあるのだろうか。生徒へのアンケートと保護者へのアンケートを親子ペアにしてデータを関連づけてみよう。

K町の保護者は81%が知り合いの子どもを誉め、40%が知らない子どもを誉めている(表2-10「よくある」と「ときどきある」の合計)。また、56%が知り合いの子どもを叱ることがあり、23%が知らない子どもを叱ることがある、と答えている。誉めるにつけ叱るにつけ、近隣の子どもとの関わりが深いことがわかる。

「親が子どもをほめる」ことは生徒が地域に「尊敬する人がいる」ことと有意な相関があり(.256)、また、「親が子どもをほめる」ことと、生徒に「声をかけてくれる人がいる」こと、生徒が「相談できる人がいる」こと、「尊敬できる人

表2-6 近所の人からほめられると声をかけてくれる人がいる

(表頭項目の%)

		声をかけてくれるひと			合計
		たくさんいる	少しいる	あまりいない	
近所の人からほめられる	よくある	10.8	8.7	> 0.0	9.5
	ときどきある	35.5	> 19.6	> 0.0	28.4
	あまりない	36.6	< 58.7	> 33.3	43.2
	ぜんぜんない	17.2	13.0	< 66.7	18.9

表2-7 知らない人からほめられると声をかけてくれる人がいる

(表頭項目の%)

		声をかけてくれるひと			合計
		たくさんいる	少しいる	あまりいない	
知らない人からほめられる	よくある	6.5	0.0	0.0	4.1
	ときどきある	17.2	13.0	> 0.0	14.9
	あまりない	37.6	39.1	33.3	37.8
	ぜんぜんない	38.7	< 47.8	< 66.7	43.2

表2-8 尊敬できる人がいると近所の人からほめられる

(表頭項目の%)

		近所の人からほめられる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
尊敬できるひと	たくさんいる	57.1	52.4	> 31.3	42.9	41.9
	少しいる	35.7	< 45.2	< 62.5	> 32.1	49.3
	あまりいない	7.1	2.4	6.3	< 25.0	8.8

表2-9 尊敬できる人がいると知らない人からほめられる

(表頭項目の%)

		知らない人からほめられる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
尊敬できるひと	たくさんいる	100.0	> 54.5	> 33.9	39.1	41.9
	少しいる	0.0	< 36.4	< 60.7	> 48.4	49.3
	あまりいない	0.0	9.1	5.4	< 12.5	8.8

表2-10 保護者が子どもをほめることと叱ること

(表頭項目の%)

〔ほめること〕	自分の子ども	知り合いの子ども	知らない子ども
よくある	14.1	11.6	2.3
ときどきある	71.8	69.8	37.2
あまりない	12.9	18.6	47.7
ぜんぜんない	1.2	0.0	12.8
〔叱ること〕	自分の子ども	知り合いの子ども	知らない子ども
よくある	47.7	2.3	1.2
ときどきある	47.7	53.5	22.1
あまりない	4.7	37.2	46.5
ぜんぜんない	0.0	7.0	30.2

表2-11 子どもの地域の大人との関わりと、親が自分の子どもをほめること

(表頭項目の%)

(子ども)		(親)自分の子どもをほめる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
声をかけてくれるひと	たくさんいる	66.7%	67.2%	> 36.4%	0.0%	62.4%
	少しいる	16.7%	< 31.1%	27.3%	100.0%	29.4%
	あまりいない	16.7%	1.6%	< 36.4%	0.0%	8.2%
相談できるひと	たくさんいる	33.3%	32.8%	27.3%	0.0%	31.8%
	少しいる	50.0%	< 60.7%	> 27.3%	0.0%	54.1%
	あまりいない	16.7%	6.6%	< 45.5%	100.0%	14.1%
尊敬できるひと	たくさんいる	50.0%	52.5%	> 18.2%	0.0%	47.1%
	少しいる	41.7%	39.3%	< 54.5%	0.0%	41.2%
	あまりいない	8.3%	8.2%	< 27.3%	100.0%	11.8%

がいる」ことをクロスすると有意差があった(表2-11)。一方、親が自分の子どもをしかることと、その子どもと地域の大人との関わりについては、有意な相関も有意差も認められなかった。親からほめられることを中心として、子どもは大人との関わりの根拠を得ていくのかもしれない。

どのような仕組みで、親が子どもをほめること、しかることと、子どもが地域の大人と関わるのが関連しているのだろうか。今後、さらに検討を進めたい。

(3)地域の大人に誉められると、人間関係に関わる自信や規範意識が育つ

それでは、このような地域の大人との関係が、中学生にどのような影響をもたらすのであろうか。表2-12と13は、子どもの規範意識と地域の大人から誉められる・叱られる体験とをクロスして、有意差と有意な相関が認められた項目である。いずれも近隣の大人から誉められることによって、人の気持ちになれるという共感性の自信や、また気の合わない人ともつきあうという包容力が育っていることがわかる。

また、表2-14からは、相談できる大人や尊敬できる大人がいることと子どもが人間関係の広がり好むことが関わることを示唆されている。

3. おわりに

中山間地という不便さや刺激の少なさを特徴とする地域ではありながら、K町では伝統行事や祭りに中学生が参加すると共に、地域の大人達から声をかけられ誉められたり叱られたりする経験を比較的豊かに持っている。そのことが、子どもの人間関係を広げ、包容力や共感性の自信が育つことにつながっているのである。とくに、地域の大人による賞賛や叱正によって、子どもは社会規範を伝達され、さらに、相談相手や尊敬の対象となることによって、地域の大人は重要な権威ある他者として子どもの言動や判断の準拠となるのである。地域の教育力は具体的には地域住民と子どもとの関わりにこそあることを考えると、K町は豊かな教育力を備えた地域であるということができよう。

今後の分析の課題としては、K町のなかにも、このような豊かな人間関係を享受できている子どもたちと、そうではない子どもたちがいることを踏まえ、地域の大人との人間関係が子どもに与える影響の負の部分にも注目しながら考察を進めていきたい。また、携帯電話の普及が子どもの人間関係に与える影響を調べ、長野県の同じ地方の町村の子どもとの比較も試みることで、より立体的に子どもの生活を理解していきたい。

表2-12 人の気持ちになれる・気の合わない人ともつきあうことと、近所の人からほめられること

(表頭項目の%)

		近所の人からほめられる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
人の気持ちになれる	とてもそう思う	35.7	> 14.3	> 4.7	< 17.2	12.8
	少しそう思う	57.1	< 73.8	> 67.2	> 48.3	64.4
	あまりそう思わない	7.1	11.9	< 25.0	< 31.0	20.8
	まったくそう思わない	0.0	0.0	3.1	3.4	2.0
気の合わない人ともつきあう	とてもそう思う	21.4	> 14.3	> 6.3	> 0.0	8.8
	少しそう思う	50.0	> 35.7	33.3	31.0	35.1
	あまりそう思わない	7.1	< 38.1	< 52.4	> 44.8	42.6
	まったくそう思わない	21.4	> 11.9	7.9	< 24.1	13.5

<>10%以上の差, <>5%以上の差を表す

表2-13 気の合わない人ともつきあうことと、知らない人からほめられること

(表頭項目の%)

		知らない人からほめられる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
気の合わない人ともつきあう	とてもそう思う	33.3	> 13.6	> 5.5	7.7	8.8
	少しそう思う	16.7	< 40.9	< 47.3	> 24.6	35.1
	あまりそう思わない	16.7	< 36.4	< 41.8	< 47.7	42.6
	まったくそう思わない	33.3	> 9.1	5.5	< 20.0	13.5

<>10%以上の差, <>5%以上の差を表す

表2-14 友達が多い方がよいと相談できるひと・尊敬できる人

(表頭項目の%)

		相談できるひと			合計
		たくさんいる	少しいる	あまりいない	
友達が多い方がよい	とてもそう思う	93.2	> 65.5	> 60.0	73.0
	少しそう思う	2.3	21.4	10.0	14.2
		尊敬できるひと			合計
友達が多い方がよい	とてもそう思う	85.5	> 65.8	> 53.8	73.0
	少しそう思う	9.7	19.2	7.7	14.2

【注】本調査は聖徳大学学術フロンティア事業第2部門「青少年の健全育成」の研究プロジェクトの一貫として、放送大学「『地域の教育』研究会」(代表：岡崎友典)と共同して推進している「中山間地における子育てと地域意識の形成に関する基礎研究」の一部である。

【参考文献】

地域社会学会編, 2000年, 『年報第12集 生活・公共性と地域形成』ハーベスト社
 地域社会学会編, 2001年, 『年報第13集 市民と地域…自己決定・協働, その主体』ハーベスト社
 放送大学「地域の教育」研究会編, 2004年, 高度経済成長期における農山村の新規学卒者の「生活体験」に関する調査研究報告書～長野県M郡K町・N村の中学卒業生の追跡調査～(執筆: 岡崎友典, 富江英俊, 岩瀬章良, 春日清孝)
 神谷国弘/中道實編, 1997年, 都市の共同性の社会学, ナカニシヤ出版

松原治郎・久富善之編, 1985年, 学習社会の成立と教育の再編, 東京大学出版会
 農林水産省大臣官房・(社)地域社会計画センター編, 1990年, 都市・農村の中堅的担い手層の将来行動予測を踏まえた農村地域活性化方策に関する調査報告書
 岡崎友典, 2004年, 改訂版 家庭・学校と地域社会～地域教育社会学～ 放送大学教育振興会
 岡崎友典, 岩瀬章良, 2002年, 「高度経済成長期における農山村の新規学卒者の「定住・移住」に関する研究」放送大学研究年報第21号, pp. 57-73
 聖徳大学生涯学習研究所編, 2005年, 生涯学習まちづくり
 住田正樹, 2001年, 地域社会と教育～子どもの発達と地域社会～ 九州大学出版会
 住田正樹・南博文編, 2003年, 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会

(2007年1月11日受理)